

結縁の日めくり その二

奉仕のない人生は意味が無い。

奉仕には犠牲が伴う。

犠牲が伴わないものは真の奉仕ではない。

……ヴァレリー神父

……………感謝とイスキア*に生きて

*イスキアする；自分の損得を考えずに人のために何かをすること。

嶽温泉郷を通り過ぎて、常盤野小中学校を過ぎれば、湯段の鄙びた温泉場はすぐそこだ。湯段の別荘群や津軽カントリークラブ岳コースと逆の方向に下れば、その奥まった所に、ひっそりとたたずまいの家が見えてくる。そこに「森のイスキア」がある。命の息吹の匂いがするこの一帯は、春から秋の季節には、どこにいても野鳥の歌声に耳を傾けることができる。この施設の主宰者は佐藤初女^{はつめ}という大正10年生まれ的女性だ。龍村仁監督の映画『地球交響曲』^{ガイア・シンフォニー}第二番で、その活動が紹介されているから、ご存知の方もいるだろう。いろいろな心の病を負ったひとを聖母のように包み込んで、自殺寸前のひとまで癒してしまう彼女は、見ず知らずののひとに、必ずおにぎりやお粥と自分が漬けたお漬物を出してふるまう。「食事を食べる人は、つくってくれた人の愛も一緒に食べるわけだから、心をこめて作らなくてははいけないと考えています」と云う。

傷ついて、萎えかかってしまった他人の心にエネルギーを注入して、あるべき姿を取り戻させる力は一体どこからやってくるのだろう。巻頭のヴァレリー神父のミサを聞いての帰るさ、「お金も能力もない私にこれ以上何ができるだろうか……そうか、私には心がある。私は心でいこう」とパッと閃いたと云う。この一大転回。

現代人は屈折しているため、慈善活動にひっそりと生きている彼女の姿に、慈善事業を踏み台にして真の信仰に入ろうとしていると利己主義の匂いを嗅ぎ出そうとしてははいないか。私たちは、ともすれば消極的思考に埋没し易く、ひいては、不調和から破壊的心理作用が働いてしまう。失望と落胆、そして落ち込んで、自らのオーラを暗くしてしまう。多くのひとは焦りに焦っているため、自分が一灯を奉げて歩いてはいるのに、足元の光が見え

なくなってしまうことに気づかない。もちろん、大宇宙に生かされて生きているという自覚も無い、自分中心の思い上がった不遜な態度。平和で幸せな環境に存在し、無事に生活できていることに感謝しているだろうか。自分の狭い知識レベルで障壁を作っている私たちは、あらゆる宗教、組織、国家、人種そして一つの主義主張に固執して生きているため、このつかの間の人生の旅路で光の光輝にめぐりあうことは今生では難しいのだろうか。

ある友人との対談で、彼女は次のように云っている。「人生とは気づきによって心を開いていくこと。生きる喜びが人生を美しく彩り、生き様にはその人の心そのまま表れるんです。だから大切なのは『自分は成長する』と心に決めて、一步を踏み出すことじゃないでしょうか。多くの人と接していてそのことを感じますね。……私の信念とは、出会った一人ひとりを大切にして、小さいと思われることをも大事にすることですね」

最後に、聖フランシスコの賛美の言葉を彼女に捧げて筆をおく。

愛と知恵があるところ

そこには恐れも無知もない。

忍耐と謙虚さがあるところ

そこには怒りも煩いもない。

貧しさと喜びがあるところ

そこには食欲も強欲もない。

平和と祈りがあるところ

そこには心配もいらだちもない。

主への畏れが家を守っていれば

敵が侵入することはできない。

慈しみと賢明さがあるならば

過度の寛容にも過酷にもならない。

『訓戒の書』(27番)からの抜粋より

—————05/12/30 未了 パウワウおじさん